

古墳時代を作った男の話(2)

福島 巖

第4章 丹後の鉄輸送ルート

1. アラシ一族の系図

記紀に系図の概略が載っているが先代旧事紀の物部氏のニギハヤヒ系列、カゴヤマ系列の両方に混入掲載されているのでそれを参考にしながらまとめるとすごい事実が分かってきた。

記紀にはアラシは但馬一家として息子の但馬諸助系列を紹介している。

筆者はこれを信じて様々な検討をしてきたがもう一つ別の大系列が存在していることを掴んだ。

アラシは紀伊(和歌山市近辺)に一家を構え6男1女の子どもを育てていたことが判明した。

この家族を建一家として取り上げ紹介する。アラシは日槍とは全く別の建斗米の名前で記録されている。彼の長男が建田背、孫に建諸隅など大量の人々が存在し丹波や尾張、吉備な

表4・1-1 アラシの子どもたち

息子	備考
建田背(勢)	初代丹波王
建宇那比	第2代丹波王
建多乎利	尾張の中心者
建麻利尼	
建弥阿久良	
建手和祢	
宇名比媛	初代和爾王妃
但馬諸助	但馬と播磨地域の開発

どの国の中心人物を輩出しているのです。そして

ここ紀伊では景行王がタジマモリとして滞在しタケル(武内宿禰)を生んだ地でもあることを読み取った。武内宿禰は後にここ紀伊で男7人、女2人の子どもを作って葛城、巨勢、蘇我、平群など奈良盆地の有力豪族の祖になっていて、彼らによって奈良盆地の全てが開拓され古墳時代の繁栄を招来したことがはっきりしてきたのです。

記紀ではアラシは地元但馬の娘マタオを娶って息子、但馬諸助を生んだとしている。しかし旧事紀(かごやま編)ではアラシは建斗米と呼ばれていて紀伊国造チナソの妹、中名草媛を妻として6男1女を生み長男が建田背であるとしている。但馬と紀伊に本宅を構え、一家は大和の地で大連合体を作りあげた—これが葛城一族とも呼ばれている。

アラシは多くの子どもたちを指揮して日本の中心部に、鉄製品を早く確実に届けるためにどうしたら良いかを熟慮して各種システムを作り上げた。彼を支えた大きな但馬集団は城崎温泉のある円山川から瀬戸内海に至る最初の輸送ルート確立に集中した。建田勢・建宇那比の子

孫、丹波^{たには}集団は丹後半島を開拓して丹後—由良川—加古川の手漕ぎ船利用の最終ルートに力を入れた。もう一つ大和葛城^{たかおわりむら}の地高尾張^{たかおわりむら}邑で多くの経験を蓄積し、尾張の地に移って行った尾張^{おわり}集団がある。一方輸送部門を担当した和爾^{わに}集団は祖神、彦国^{ひこくに}押人の妃がアラシトの唯一の娘、宇名比媛^{うなひひめ}であった。

2. 長男建田背

建田^{けんた}勢^せ（一般には建田背^{けんたせ}）は丹波^{たに}国^{くに}造^{のみやつこ}、海部^{かいふ}直^{あたひ}の祖であると記されている。これを丹波道主^{たんばどうしゅ}王^{おう}と呼び、この地域の大王の祖になっている。彼の大事な仕事は岩場ばかりで休憩所を確保できず手漕ぎ船で渡ることのできない丹後半島の先端^{きょうみさき}（経ヶ岬）をどう乗り越えるか、難題を解決することにかかっていた。

一帯は大きな岩壁が連なるリアス式海岸で水の補給や休憩する場所が取れない。しかも半島を回って宮津に出るには7日間にも渡る航海が必要であり、毎日の飲み水と休憩場所を必要とする渡航は困難であった。そこで考え出されたのが半島の川を遡上^{そじょう}して曳船^{ひきふね}で丘陵を越え宮津市側に至る交通ルートの構築であった。

和爾氏と建一族の結びつきは強く丹波の道主王、県主、国造と呼ばれる支配者の中に建振熊宿祢^{たてふるくますくね}が登場する。海部氏系図の中の「海部氏^{かんちゆう}勘注系図」によると丹後海部氏の祖は「建振熊宿祢^{たてふるくまのすくね}」で海部直の姓を賜り国造に任命されたという。以降海部氏の姓は「海部^{あたひ}直・・・」の名前で表記されている。

筆者の想定ではアラシト系列は航路や港、倉庫などの建設事業には長けているが商品（鉄など）をどこにどう売るか総合商社の機能^{わに}は和爾系が握っていたようである。一度航路が完成してしまえば和爾系の力が強くなるので武振熊宿祢が海部直に任命され丹後半島の責任者になったのは頷ける。

丹後半島から由良川^{ゆらがわ}を経由して加古川に鉄を運ぶルートBが関西に届けるメインルートになっていく。古墳の黄金時代を築いたのは加古川から各地に運ばれた鉄が農作業や製造業の生産性を飛躍的に高め社会に活力を与えたのである。アラシトの各地を歩いた探索により幹線ルートは若狭湾に流れ出す大河「由良川^{ゆらがわ}」から関西に送り込むことに決めることができた。

3. 丹後町から与謝野への道

韓半島ー九州から日本海側を各地の潟湖^{せきこ}に休みながら但馬までやってきた船は久美浜湾^{くみはまわん}に係留され、船員たちはここで休息した。アラシは久美浜湾にいる船をどこに港を作って内陸用の船に変え、竹野川を遡上するかを検討した。この課題を研究し立案・実行したのは長男建田勢をリーダーにする建一族であった。

建田勢は丹波の主として久美浜町甲山駅から東南 1.5km、川上川東南にある海部^{かいふ}の館に葛城高尾張から着任した。近くの矢田神社は建田勢とその息子建諸隅^{たけもろすみ ゆ ぐり}が祭神になっている。田勢は父親アラシ(建斗米^{たけとめ})の指導を受け網野湾潟湖に丘陵を利用して船の港湾施設を作った。日本海側の河口は海から押し寄せる砂によって砂丘ができ易く大きな潟湖^{せきこ}(ラグーン)ができていた(現在の網野市は大きな湖だった)。そのため船に係留するための港、岩壁を作った。兵庫県朝来市池田古墳^{あきこし}の事例を参考にして作り上げた。

網野に作ったものが銚子山古墳で日本海側最大規模の前方後円墳とされている。ここに作った港湾は韓半島から九州を経由して運ばれてきた鉄素材を円山川を経由して播磨に送り届ける役割を担っていた。銚子山古墳で円山川専用の船に積み替え船員も入れ替えられていた。

由良川に鉄を運ぶためには竹野川河口に大きな港湾設備をつくる必要があった。それを任されたのは建田勢の息子、建諸隅^{たけもろすみ}で彼は河口の竹野に府を置いて竹野地区及びその周辺の開発を進めるとともに神明山古墳^{しんめいやま}を建設した(約 190m長さの前方後円墳)。

潟湖が大きかったため河口からはずいぶん陸地に上がっているが丘陵をうまく利用して周濠をめぐらせた豪華な港である。埴輪が並ぶくらいで王の遺品などは近くに作られている小さな円墳^{うぶすな}(産砂古墳)に集められている。諸隅は記紀に登場している竹野媛の父親であり大県主由基理^{ゆ ぐり}とも呼ばれている。250 年頃には建田背(勢)は大和に戻り纏向古墳群の開発に当たっている。

網野町からくる道が竹野川にぶつかる所に大田南古墳群があり開発初期からの王家の人々が眠っている。その5号墳から青竜3年銘(235 年)の四神鏡が出土している。全国で紀年入の銅鏡は13面しか発見されていないが最も古い鏡である。これは間違いなく卑弥呼鏡でアラシと直接話ができた人々が持っていたものであると思われる。

丹後の主は次のような人々で地域の開拓が終了すると次に開発を迎える場所、奈良、大阪地域に移って行った。

(1) 建田(勢)背 網野の銚子山古墳完了後、暫くして京都市久世(木津川)に行き大和にもどる。纏向の溜池及び古墳群の開発に従事する。

(2)建諸隅 竹野地域の開発終了後、大和に移って三輪山一帯の開発者 箸墓古墳の製造責任者で丹後半島神名山古墳の経験を生かし巨大なものを作り上げた。

(3)川上眞雅 諸隅の兄 妹は竹野媛 一千口の鉄剣を作り石上神社に奉納した。川上谷川一帯に大きな鉄器製造工場があった。日本得魂(海部系)、倭得玉彦(尾張系)とも呼ばれている。

4. 丹後半島の古墳配置



表 4・4-1 丹後の古墳配置

名称	時代	副葬品と所在地	備考
神明山古墳	280年頃	葺石、埴輪、円形造出 周濠 船を漕ぐ人の入った埴輪片 前方後円墳 190m 京丹後市丹後町宮	
産砂山古墳 円墳 径 54m	300年頃	葺石、埴輪 地元産長持型石棺直葬 棺内から環頭刀子、刀剣類、変形四獣鏡など多数出土 京丹後市丹後町竹野宮ノ腰	
大田南5号墳 方墳 19x12m	250年以降	大主体部の石棺から青竜3年(235)銘方格規矩四神鏡出土 京丹後市弥栄町和田野大田 大小25基の古墳群 卑弥呼の鏡	日本最古の銅鏡
銚子山古墳	270年頃	葺石、埴輪、南側周溝 2基の陪塚 竪穴式石室? 前方後円墳 198m 京丹後市網野町	
赤坂今井墳丘墓 方墳 1辺 40m		埋葬施設が集中している 耳飾り、頭飾りなどガラス勾玉 22、ガラス管玉 57、碧玉製管球 39 など ブルーの飾りは注目	王家の秘宝

建田背は大和の地に戻り、丹波の主の座は弟の建宇那比と節名草の娘節媛との間に生まれた
 苗連王が後を引き継ぎ与謝郡比治の里が彼の国府になっている。ここから近い赤坂今井墳
 墓は豪華な貴金属や珍しいガラス装飾品がたくさん出てきた。特にブルーの頭や耳飾りは中国

や朝鮮にもないという。埋葬施設が 25 基位あり、舟底状木棺^{もっかん}や土棺^{どかん}などの木棺墓群である。この中心人物は建宇那比^{たけうなひ}だったのではないかとされている。建斗米、三男の建多乎利^{たけたおり}は笛吹^{むらじ}運を引き継いでか根拠地を葛城高尾張の地に移り(現葛城市笛吹)そのの笛吹神社の神官を務める持田氏が現在まで続いている。丹後半島から引き上げた建一族は大和の開発に専念しその後かなりの人々が尾張に移動している。たった一人の建系女性、宇名比媛^{うなひ}は和爾^{わに}氏の祖、和爾彦國押人^{わにひくにおしひと}の妃になり押媛^{おしひめ}を生みアラシの海運業を支える和爾氏発展の生みの親になっている。アラシと和爾家の強固な関係はこのようにして作られていた。

5. 与謝野古墳群の役割

丹後半島から送られてきた鉄を与謝野^{よきの}町の古墳で積み荷とクルーを入れ替えて由良川用の船に変える。現在は与謝野盆地には野田川が流れているが4、5世紀には未だ潟湖のままであった。この古墳は丹後半島でも早期に作られたとされている。

なぜだろうか？

大和と丹後の間を建一族^{たけし}は行き来している。

その道はどこを通っていたか？

彼らが生まれ育った奈良盆地を出発すると山城方向を目指して木津川—亀岡(当時は大きな湖、舟で渡る)—綾部^{ふくちやま}—福知山と渡ってくる。

福知山を西に向かい県道 176 号線に沿って大江山の峠を越えて与謝野町に入る。綾部市^{あやべ}は鉄の輸送路でもないのに私市^{きさい}円山古墳^{ちまるやま}の他 54mと 32mの方墳が2基も存在している。建一家が綾部の地を旅の宿泊施設などとして利用し世話になっているのが大切にしていた理由であろう。もう一つ考えられるのは特殊な金属や玉などの資材の産地だった可能性もある。これらを丹後の工場加工して鉄の代金として半島に届けたと思われる。

6. 与謝野の古墳群(表4. 5-1)

名称	時代	副葬品と所在地	備考
私市円山古墳 円墳 81m	4世紀	埋葬施設3 短甲や鎧、武器等多数 銅鏡や玉、農機具類など多数 3重の埴輪列	京都府最大の円墳
白米山古墳 前方後円墳 90m	4世紀	後円部には複数の石室(4m竪穴式)や他にも小石室や石棺があつて墓域になっている 与謝野町後野	
作山古墳群 円墳、方墳、前方後円墳	4世紀末	5基で構成 1号は28mの円墳 石棺から人骨、変形四獣銅鏡、石釧、鉄製品などが出土 周囲には15基埴輪棺・木棺墓 与謝野町明石	

蛭子山古墳 前方後円墳 145m	4世紀 後半	5基の古墳あり1号墳は大きい が他は小さな方墳である 1号墳の3基の石棺の中央から銅鏡、 多数の鉄製武器が出土 丹後型円筒・朝顔型埴輪 与謝野町明石	えびす山 古墳群
広峯 15号墳 前方後円墳 40m	4世紀 後半	30数基からなる古墳群の1基 割竹型木棺から「景初4年盤龍鏡、 管玉、鉄製武器などが出土。 福知山市東羽合町	

潟湖の南の端に白米山古墳がある。古墳の内容を見ると石室や石棺で占められているようだ。実際に使われた蛭子山古墳など2基の古墳はそれよりも更に北に寄っている。

筆者の推定では与謝野湖から由良川につなげるルートとして考えたのが白米山古墳を基地にした大江峠を越えて福知山に至る曳船道であったのではないかと推定されている。与謝野と大江の標高は55m位であるが峠は370mもあり、曳船区間も約15kmと長い。実際やってみて非常に困難で見通しが立たず断念してしまった。そこで決めたのが宮津湾から若狭を経由して由良川の河口から入る航路であった。これらも建田勢の指導の元に進められた。



港湾の機能は蛭子山1号古墳にあった。蛭子山と作山古墳は近接して並んでいる。古墳群としては円墳がたくさん残存しているがほとんどは石棺墓や木棺墓と鏡、装飾品、武器類である。古い古墳の典型であるが葺石と丹後型円筒埴輪が並んでいる。ここは与謝野湖畔に作られているため川によって運ばれる砂の心配が無いので周濠は作られてない。また丘陵を利用して作ったためかそれほど大きな工事ではなかったようだ。王が亡くなる都度円墳や方墳が作られていった模様。現在は古墳のある場所が野田川のかなり離れた上流にあるのが不思議だったがその当時は湖であったことを知って了解できた。



7. 氷上回廊

コースBの最大の特長は由良川と加古川が山越えせずに2つの川同志がつながっていることである。

これは丹波市氷上町石生で「氷上回廊」と呼ばれている日本で一番低い分水嶺(専門用語では分水界)のためである。石生駅に近い所は標高 95m、この長さ約 1.2kmの範囲はその分水嶺になっている。由良川の支流竹田川から枝分かれした黒井川が通る。一方加古川水系につながる高谷川が西方から入り込んでいる。

この分水嶺で両者が共存しているので船のように意志を持つ物体にとっては瀬戸内海へも日本海へも行くことができる。距離もちょうど中間地点になっている。観光用の「水分かれ公園」が作られていて仕組みが分かるモデルとその説明がある。写真の上下方向に流れるのが高谷川(加古川水系)、右から流れ込むのが黒井川である。

アラントはこの水系の情報を早くからキャッチして息子の建田背に由良川へ運び込む手段を検討させた。出雲の大王スサノオやオオクニヌシも瀬戸内に出るルートとして積極的に活用していたようである。

8. 加古川河口の古墳群

－ 瀬戸内の鉄発送大基地 －

加古川河口は丹後半島を出発し与謝野で荷を積み替えた手漕ぎ船が瀬戸内海の最終ポイントとしている場所である。ここから各地に出発する船に荷物を振り分ける作業で周辺は活況を呈していた。

表-4・8-1 加古川の古墳群

名称	時代	副葬品と所在地	備考
日岡山古墳群 前方後円墳 80m	4世紀初旬	古墳群は前方後円墳5基、円墳3基からなる大古墳群 代表墳は稲日大郎媛の陵墓とし宮内庁指定 同范三角縁銅鏡 が出土 関西各地へ運ぶ基地 加古川町大野	最大の輸 送基地
行者塚古墳 前方後円墳 99m	5世紀初頭	西条古墳群 3基の大型古墳 人塚古墳 64mの円墳、尼塚 古墳は 51mの円墳 古墳群にあった数十基の小型円墳は消え た 金剛製帯金具、鉄製馬具 加古川町西条山手	

加古川の左岸に作られた最初の古墳と考えられる日岡第1号墳が景行王妃印南郎女の陵墓とされ、80m長の前方後円墳である。運ぶ荷物(ほとんどが鉄)が増えだしたので順次古墳の数を増やして規模を大きくしていった。ここで船に積み替え行き先も最初からあった淡路島—紀伊ルート以外に神戸から淀川水系を利用したいくつかの向先、吉備や四国に向けたルートもできた。

大型古墳はいづれも加古川左岸の平野の方向に前方部を向けている。加古川での荷役作業を

考えれば川と平行に周濠が作られるのは当然である。

播磨^{はりま}風土記に印南^{いんなみ}大^お郎^{いら}姫^{つめ}皇后^{ひめ}が亡くなった時の話が語られていてこの日岡に葬られたと出ているので、宮内庁はそれをキーにして明治時代指定墓にされた。

丹後半島からの最初の荷が届いたのは景行王が印南^{いんなみ}(加古川)で皇后と出会う王就任のまぎわと考えれば時期的には4世紀前半に相当する。後の4基は5世紀までに順次増強されたものと思われる。加古川の鉄の取り扱い基地は日岡の古墳群でこれらの建設や船のオペレーションには多数の労働者が集合し大都会ができた。この人達が居住したのが西条古墳群でたくさんの小円墳が集中していたようである。これらのものは加古川の町を作る時に壊されて消失してしまい、いくつかの大型前方後円墳にまとめられたという。

第5章 丹波王国を作った人々

3世紀から4世紀にかけて山陰の丹後半島に日本列島で最も繁栄していた地域丹波の国が存在した。この地域が鉄の交易の基地になって朝鮮半島と近畿地方をつないで人間の往来を促し日本国誕生のきっかけを作った。

韓半島では本州の中央部、関西方面で鉄機具が不足している事を知っていて生産量の増えた鉄の販売促進としてここをターゲットにしていた。その一環として日本列島に送った人がツヌガアラシトである。彼は邪馬台国の王子(記紀では新羅・大加羅国^{しらぎ おおからら}などの王子)が来日して但馬、丹波、大和の地に住み関西各地の開発を指揮した。丹後半島では韓半島から送られてきた鉄を受け入れ、その見返りとして送る、織物や貴金属、ガラス工芸、などを作る工場がたくさん並んでいた。東西から集まる行商人と工場で働く人たちの商店街ができて人が密集し、弥栄町ー峰山町ー大宮町など竹野川沿いの町々は交易の中心地になっていた。(4章の図4・4ー1参照)

1. 3～4世紀鉄の道を切り開いた人々

右の表5. 1ー1には丹後半島の開発を行い鉄素材を奈良盆地に運び込んだ人々の活躍した時代と地域の王(国造、県主)がお互いにどのような関係だったかを表している。横軸は彼らの属している人間集団である。

即位	但馬	丹波	尾張	和爾
230	アラシト	建斗米	建斗米	*
253	諸助	建田背	建田背	彦国押人
276	斐泥	建諸隅	建諸隅	和爾彦押人
299	ヒナラキ	川上真雅	倭的玉彦	彦国姥津
322	景行	大矢田彦	弟彦	彦国葺
345	仲哀	大倉岐	乎縫	大口納
368	応神	明国彦	乎止与	難波宿祢
391	仁徳	建振熊	建稻種	建振熊
414	履中	振熊宿祢	尾張根	米餅搗

アラシトは但馬国では天日槍、とか天日矛と呼ばれ、建一家では建斗米であるがこれは全て同一人物である。但馬系の人々は輸送路Aに主力を投入していた。

輸送路Bを担当したのは丹波系と尾張系であった。丹後を担当した人たちは開発が終了した後大和に戻り奈良盆地の開発に時間を費やしている。アラシトを初代とすると丹波、尾張の関係は2、3代は同一人物、それ以降は別の名前になっているが大倉岐までは同一人物であると思われる。尾張の乎止与の時、関係者が尾張に移動しているのでこれ以降は全く共通の人はいない。

2. 建一家

アラシトの紀伊で生まれた子供たちが丹後半島の開発の指揮をとった。特に鉄の道の設置の

技術的な課題には熱心で韓半島では経験してこなかった問題であった。

① 建田背

丹波・但馬^{くにのみやっこ}国造^{かいふのあたし}、海部直^{みちぬし}の祖であると記されている。これを丹波道主王と呼び、この地域の大王の祖になっている。製鉄所もここ丹後に建設され東西から交易商人や工場で働く人たちが集合してきた。大宮売神社の辺りには大きな市場ができて商売人が活発な取引をしたことが出土する遺品によって証明されている。田背はアラシトと共に半島からやってきた息長^{おきなが}氏の娘^{みずよりひめ}、水依媛を娶り諸隅^{みちのうしおう}(美知能宇斯王=道主王)を生んでいる。

建一家は婚姻関係により最初から一緒にやってきた鉄作りの専門家集団、息長氏との強い結びつきがあった。田背は網野の銚子山古墳完了後、暫くして京都市久世(木津川)に行き大和にもどる。纏向^{まきむく}の溜池^{ためいけ}及び古墳群の開発を指導した。

② 建諸隅(由碁理)

竹野地区の開発をし、竹野川入口に港湾施設を作るなど大活躍をした王で系譜には建諸隅^{たけもろすみ}として扱われている。また一般には「丹波の由碁理^{ゆごり}」として有名である。大筒木は山城国綴喜郡内にあり、木津川周辺をさす。丹後の竹野地域開発終了後、一旦木津に留まって奈良盆地の北部を開拓後、大和葛城高尾張に移り三輪山地区の改良に取り組んだ。丹波のカジサハ媛との間に雷^{いかづち}王を生んだ。大和で人々が伝染病と飢えで苦しんでいる時、物部氏^{おおみなくち}の大水口宿禰^{ほすみ}(穗積氏の祖)と組んで大田タネコの事業を立ち上げて箸墓古墳を作る責任者になった。

③ 川上眞稚

諸隅の児で妹は竹野媛^{たけのひめ}。川上谷川一帯に大きな鉄器製造工場がありここで一千口の鉄剣を作り石上^{いそのかみ}神社に奉納した。倭得玉彦^{やまとたまひこ}(魂)の表記で海部系譜に登場し、息長系では加邇米雷^{かにめいかちおう}王とも呼ばれている。名前の通り久美浜湾に流れ出す川上谷川の支流須田^{すだ}地区に拠点築いた。ここには宮殿があって王者の谷と呼ばれるほど豪族の古墳が多くある。湯舟坂^{ゆふねさか}2号墳からは多くの貴重な遺品が発掘されている。熊野若宮三神社など古くから伝わる神社も多い。久美浜湾は交易の中心基地であり船乗りの休憩所など多数存在していた。ここを取り仕切っていた人が和爾^{わに}氏である。和爾氏とアラシト一家との交流は密接で日本海から近畿地方に運ぶ鉄など物資の輸送は和爾氏一族の独占事業だった観がある。ここに進出して拠点を大きくし、和爾氏とより密接にながっていったのが川上眞稚^{かわかみまさお}であり大海^{おおあま}宿禰とも呼ばれている。後に丹波の海部氏(海部直)を引き継ぐ人はここ出身の和邇氏である。

④ ^{おおやたひこ}大矢田彦

^{いふなひ}意富那比(海部系)、^{おとひこ}弟彦(尾張系)と呼ばれ息長系には息長宿祢と呼ばれて^{おきながおびひめ じんぐう}息長帯媛(神功皇后)の親になっている。

⑤ ^{おおくらき}大倉岐 丹波の国造に、乎逢(海部系)、淡夜別(尾張系)

⑥ ^{みんくにひこ}明国彦 小登興(海部系)、乎止与(尾張系)・尾張氏の祖(名古屋に移る)

⑦ ^{たてふるくま}建振熊 海部直の姓を貰い丹後海部氏の祖となる

3. 和爾系の人脈

和爾氏は出雲の国に「白うさぎ」を救ったワニの説話があるように古くから海運を営む氏族として存在してきた。ワニ氏に関しては日本書紀の仲哀天皇記に次の説話がある。九州の^{くまそ}熊襲が叛いてその征伐に出かけた折、山口県の^{とようら}豊浦(下関市、^{ひびきなだ}響灘に面した場所)で、ワニ氏が^{ちゅうあい}仲哀王を大きな船に鏡や剣、ヤサカニなどの宝物をかけてお迎えし、^{えんが}遠賀川河口一帯の広い地域の魚や塩を取る権利を天皇に献上した。天皇はワニ氏を^{おかあがたぬし}岡県主に任命した。半島の金海と九州の交易を支配していた安曇氏の拠点是对馬の^{あそう}浅茅湾に接している現在の豊玉町で^{わたつみ}和多都美神社そのものが安曇氏の宮殿であった。安曇氏の直接の交易は北九州の遠賀川河口域まででその先はワニ氏に任せていたようで下関市から八幡市を含む陸地と点在する島々の領有権を持っていた。アラシトが来日した時も下関付近は重要な地点とみなし周南市本陣町にある竹島古墳(全長56m



図5・3-1 竹島古墳
三角縁神獸鏡

方後円墳)から正始元年(240年)銘の三角縁神獸鏡含む3点の銅鏡が出土している。

図5・3-1に見られるように船先案内の目的で頻繁に使われたと見られ破損している。このワニ氏から独立した和爾氏が日本海側の但馬国出石や丹後半島から瀬戸内海までの航路を独占していたものと思われる。

① 天足彦国入

アラシトが但馬にやってきて輸送業を依頼した和爾系的人物はこの人。孝昭天皇の子どもになっているが天照系はあ

りえない。建系和爾の祖で但馬・丹波地区の基礎を築いた人。

② 彦国押人

円山川系の鉄の輸送を開始した時の責任者で組織を大きくした人物。アラシの唯一の娘宇名比媛^{うなひひめ}が彼の元に嫁いでいてアラシの力の入れ方も大きかった。

③ 彦押人

妃は押媛

④ 彦国オケツ

和爾・鉄輸送部の祖とされているオケツ命は久美浜湾周辺で海運業を経営し、オケツの娘たちは但馬家一族と婚姻を通して一体感を強めていった。近畿への物資の輸送はタネコの時諸隅プロジェクトによって一層活発になり天理市に近くに和爾^{わにむら}邑が形成された。彼の妻が由基理の娘竹野媛の可能性が高い。妹のオケツ媛は清彦の妻、娘のオケツ媛はスガノモロオの妻になっている。古事記には架空の存在である日子坐王^{ひこいます}の妻に書かれているがこれは間違いである。

⑦ 建振熊は海部直になった功労者

神功皇后が新羅遠征の時、建振熊^{たてふるくま}は丹波、但馬、若狭の海人300人を集め船長として行動した。凱旋の翌年九州から息子応神を乗せて帰還しようとした時、これを阻もうとする忍熊王^{おしくま}との戦になった。この戦いで建振熊が活躍し忍熊王を琵琶湖のほとりで滅ぼした。この功績が認められて和爾氏の名前は有名になるが海部の姓を賜られたのはその息子建振熊宿禰になってからである。振熊は軍隊を編成して戦ったとのストーリーであるが筆者は半島状況からみてこのような事実には疑問がある。

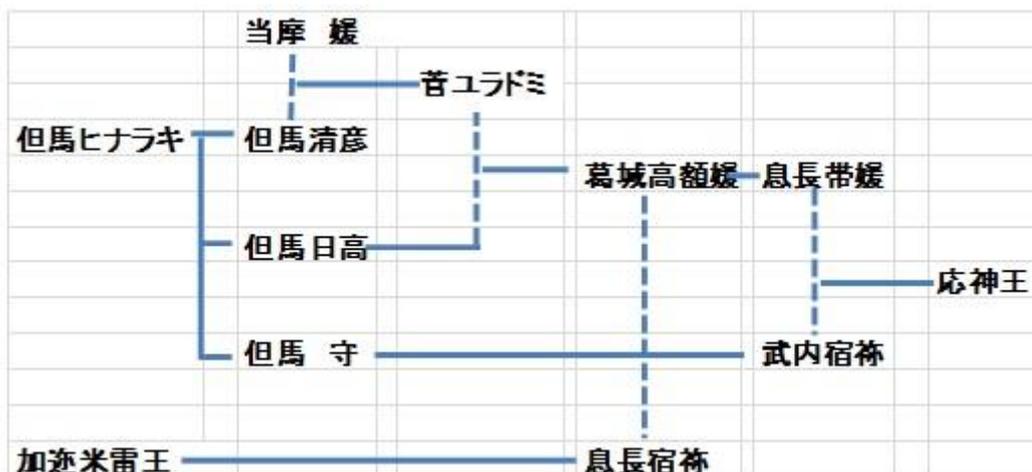
建振熊宿禰は応神朝になって丹波、但馬、若狭にまたがる地域の国造となっている。その支配の拠点は、若狭木津高向宮とされる。現在の福井県大飯郡高浜町。建振熊宿禰の時代から丹波の一族は海部^{あまべ}と称するようになる。丹波、但馬、若狭が彼の支配地域であるが、本拠地は大和和爾すなわち現在の奈良県天理市和爾^{てんりしわに}である。主筋の和爾氏から分家が多く発生し、米餅搗大臣の系統から春日氏が生まれ大きな勢力になった。

和爾氏は景行・仲哀・応神らツヌガ系の各天皇と一体になって行動し、時代が進むと共に取り扱う積み荷の量が飛躍的に増えた。そのような背景から地盤である奈良市近郊に大型の古墳をたくさん作り上げた。応神天皇の時代、海運ルートCが使われるようになってから琵琶湖を一直線に南下できるようになった。和爾氏は当然琵琶湖の海運を握ったので大津市の琵琶大橋の近く真野川や和邇川周辺におびたしい和爾関連の古墳群が出現する。和爾氏から分かれた春日・小野・石上・道風・春山などを含む和邇大古墳群である。

4. 息長氏の系統

アラシは宇治川を遡って近江の国、吾名(アナ)村にしばらく住んだ。近江国の鏡村の谷の陶人はアラシと一緒に来た彼の従者である。「倭名抄」にも、近江国坂田郡に阿那という地名があったことが記されている。後に「息長村」と呼ばれていた。息長村は、息長一族の本拠地であり、「鏡谷」の近くにある。三上山麓の「御上神社」は、息長氏の祖神、「天之御影命」を祀っているが、日本の鍛冶の祖神と称した鉄の製造に関する集団であったことが推定できる。神社の東、国道8号線を挟んで反対側にそびえる標高432mの三上山は、御上神社のご神体となっている神聖な山である。社家は三上氏と呼ばれている。祭神は、記紀に登場する製鉄・鍛冶の神、天目一箇神と同一視されている御影大神。製鉄や鑄造・鍛冶に携わる人びとが、激しく燃えさかる炎を片目で観察して、溶鉱炉や溶解炉の温度を判断したり、炉のなかに風を送るフィゴとよばれる装置を片足で強く踏んだりした為に、片足で隻眼(片目)の人が多かったと言われる。この神の娘は、「息長水依比売」であり但馬一家と強く結びついていった。仲哀天皇夫妻はアラシの6代孫であり気心の知れたカップルであることが理解できる。

表5・4-1 武内宿禰と神功皇后



息長氏は、和邇氏等と同じく天皇家をその皇族などに妃を供給する形で蔭で支えてきた氏族で

No.	息長氏内の存在	相手の人
1	御影	日槍の友人
2	息長水依媛	建田背
3	建諸隅	丹波アジサハ媛
4	加邇米雷王	丹波遠津臣娘
5	息長宿禰(大矢田彦)	葛城タカメ媛
6	息長帯媛(神功皇后)	仲哀天皇(建内宿禰)
7	息長真若中媛	応神天皇
8	若沼毛二俣王	弟日売真若媛

あるが、和爾氏は離れた存在であるのに対して息長氏は天皇家と一体になってしまっているの息長氏独自の存在は表に出なかったと思われる。

表5. 4-2 代表的な息長氏

息長氏の系統を追ってみると

以下のように整理することができる。

息長宿祢が大矢田彦であること、息長帯媛の親は但馬ヒタカの娘であることが分かり神功皇后は姓は息長であるが但馬家の一族そのものである。仲哀と神功の夫婦はいとこ同士の結婚であった。

① 天之御影

アラシトの友人で半島からその集団の副隊長格である。息長氏一族の引率者であり砂鉄から鉄を取り出し工作機械などを製造する製鉄業を営んだ。

② 息長水依媛

御影の長女で建田背(丹波道主王)の妻。建斗米の長男が御影の長女を娶っているので息長氏と建一家は合体した大家族で息長氏単独の存在は薄くなっている。

③ 丹波ミチノウシ王

建諸隅(由基理)妻は丹波川上マスメ。

④ 加邇米雷王

川上眞稚(倭得玉彦)、妻は遠津臣娘タカキ媛

⑤ 息長宿祢

雷王の息子大矢田彦(川上麻須稚郎子)が息長宿祢であり、妻は清彦の弟ヒタカの娘葛城高額媛であった。

⑥ 息長帯媛

神功皇后 仲哀天皇の皇后で応神天皇の母

⑦ 息長真若中媛

スガノモロオの3人娘の一人、応神天皇の皇后

⑧ 若沼毛二俣王

妻は弟日売真若媛

⑨ 意富富杼王

大郎子とも呼ばれ息長氏の祖とされている。

和爾氏や葛城氏のように代表的な妃がいないことや息長氏の古墳がないことが不思議がられているが天皇家の古墳が息長氏の古墳でもあるわけである。12代目に乎富等大公王=継体天皇が生まれるが応神系5代目であると同時に息長家を引き継ぐ天皇でもあった。

近江は八幡系の神社が多く天目一箇神を祀る神社が多い。また金の細工や金糸を扱う金作者の神を合祀する所も多い。

5. 丹波の全盛期の姿

丹波の久美浜湾から近畿への輸送ルート(ルートB)を開発して大量の重量物を運搬可能にする事業をツヌガアラシト指揮の元、建田勢(田背)がリーダーになって進められ建諸隅、川上眞雅、大矢田彦など5世代に渡って進められ、4世紀中頃にはBルートが完成して日本海側からの大動脈が動き出した。

特に注目すべきは同じ鉄仲間の息長氏と輸送担当の和爾氏一族が一緒に取り組んでいることである。製鉄所も丹後に建設され東西から交易商人や工場で働く人たちが集合してきた。大宮売神社の辺りには大きな市場ができて商売人が活発な取引をしたことが出土する遺品に依って証明されている。

6. 丹後王国の没落

この地が最も栄えたのは4世紀から5世紀初めまで。それ以降は大型帆船の登場によつ丹後半島を越えて東に航行できるようになったため敦賀の津まで直行できるようになった。応神天皇の時代以降徐々に韓半島からの製鉄原料の輸送は敦賀に達し、そこから黒河川を朔上し曳船にて近江塩津に達する路線が開発された。琵琶湖を船で縦断する物資の交易ルートが完成し製鉄も琵琶湖の北部で行われるようになった。日本海と難波が最短距離で結ばれた結果敦賀の港が新しい重要拠点になり敦賀の^{けひ}気比神宮の存在が重みを増した。丹後半島で生活していた人達も仕事にあぶれて琵琶湖周辺や奈良盆地にできた新しい交易の中心地へと移住して行った。

現在の天理市周辺への移住者が多く天理教信者がやっつこなかったらここは大和丹波市になっていたであろうとの説もあったようである。

参考文献

「古代丹後王国は、あつた」伴とし子著

「丹後王国論」京丹後市教育委員会 pdfネット検索

「古代史の謎は海路で解ける」長野正孝著 PHP新書